

戦略的創造研究推進事業さきがけ 知の創生と情報社会
研究課題「空間的な情報システムの設計開発支援システム」

想像性と創造活動を 広げるシステムを作りたい



なかにし・やすと 1970年生まれ。
私立奈良学園高等学校卒業。東京大学工学部機械工学科、同大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻 博士課程修了。博士(工学)。電気通信大学大学院情報システム学研究所助手、東京農工大学工学部情報コミュニケーション工学科助教授を経て、2005年から現職。09年～現在、さきがけ研究者(兼任)。趣味はオートバイ、サッカー、カポエイラ(ブラジルのダンス的格闘技)。

慶應義塾大学 環境情報学部

中西 泰人 准教授



都市の情報空間デザインを 支援するシステムを開発

JST「さきがけ」では、ショッピングモールや駅、美術館など、多くの人々が集う空間の中で、魅力的に情報を見せるデザインにするための設計開発支援システムの研究をしています。開発した「CityCompiler (シティコンパイラ)」というシステムを使えば、「情報がどう見られるか・どう動くか」を、仮想空間の中で試行しながら設計できます。人々が情報に接する様子をシミュレーションしながら空間デザインができるので、建築家やアーティストとの共同作業も進めやすくなります。このシステムは、特に事前にテストができない状況に有効です。例えば美術館の展覧会では会場の設営期間は数日に限られますが、仮想空間と模型空間を併用してシミュレーションをすると、頭の中の想像だけでは気づかない問題点がわかってきます。このように、事前に会場の状況をシミュレーションし、設計上の問題点を洗い出して解消することで、来館者の視点に立った情報と空間のデザインが可能になります。



興味の対象が 「オートバイ」から「人間」へ

始めから「情報システム系」の研究者を目指していたわけではありません。

高校生の頃はオートバイが好きで、エンジニアになろうと大学では機械工学科を選びました。いざ機械工学の勉強をしてみると、もう少し人間に近いことがやりたくって、ロボットの研究室に入りました。大学院で



平野啓一郎氏の小説「DAWN」をメディアアート作品化し、東京都現代美術館にて展示。森野和馬氏、ケンイシイ氏と共同制作。

バイクが趣味という中西さんの愛車と娘さん。「いつか娘とツーリングに出かけたい」とのこと。



は都市計画や設計支援を専門にした研究室に移り、設計支援システムを研究するようになりました。大学でさまざまなことを学び、多くの人と出会う中で、自分の興味対象が、機械ではなく人間であることが次第にわかってきました。その頃から関心を持ち続けているのが、「何かを創造する時に、人は何をどう考えているのか」ということです。その問いに自ら答える形で、人の創造活動を助ける道具としての設計開発支援システムの研究を始めたのです。

現在の研究につながるもう一つのきっかけに、学生時代に登場した最先端コンピュータとの出会いがあります。マウスを使ってコンピュータと対話しながら多様なモノを創造できるという感覚は、それまでの“文字をベースとしたパソコン”にはないものでした。この時の原体験が、人の創造性を高め、対話するように快適に扱えるシステムを発想していく上で、大きな基盤になっています。



出合いを重ねる中で、 やりたいことが見えてくる

「CityCompiler」は情報デザインを空間デザインに広げようとする人を支援するシステムですが、私が追究したいのは、もっと広い意味で人の役に立つシステムです。日常生活の中に溶け込んで、心を豊かにしたり、人と人とのコミュニケーションや双方向の対話を楽しくするような……。便利だけでは豊かな社会にならないと思うからです。具体的には、人の創造活動について考える研究の一環として、「芸術表現に新しい技術的発明を利用する」メディアアートを制作しています。その中でいくつかの作品を小説家の平野啓一郎氏と共同で制作したり、創造的な環境としてのオフィスのデザインの仕事にもかわり「アイデアキャンプ」という本を出版したりと、いろいろなことに挑戦して活動の場を広げてきました。

私の場合は分野を横断して新しいモノやシステムを作ることが研究なので、何が専門なのかわかりにくいかもしれません。さきがけ研究者の中でも異色の存在だと思います(笑)。これからも分野を横断した新しいアイデアを発想して実現することを深掘りしていきたいです。

学生の皆さん、今やりたいことがハッキリと見えていなくても、決して焦ることはありません。最初から進路を一つの方向に絞り込む必要はないと思います。私自身も、クルマやバイクの設計者を夢見て大学に入りましたが、出合いを重ねる中で、自分の興味の対象と本当にやりたいことを見つかることができました。たくさんの人と出合い、たくさんの世界を知りながら、自分の進むべき道を見つけてほしいと思います。

TEXT: 佐々木正孝 / PHOTO: 坂口トモキ